

コギトを「最善の説明への推論(IBE)」によって導出する

田村 歩(国立茨城工業高等専門学校)

通説では、デカルトはそれ以前の哲学的伝統と決別し、独自の哲学をもってして近世哲学を切り拓いたとされてきた。研究が進み、デカルト哲学はストア学派やスコラ哲学といった古代・中世の哲学思想との緊密な関係性を有していることが明らかにされた現在においても、その哲学は、スコラ哲学の最終形態として中世の最後尾に列せられることはなく、やはり近世の先頭に祭り上げられるのが常である。その最大の理由は、精神と物体との事象的区別によって自然を機械論的に捉え、近代自然科学の発展の礎を築いたということであろう。古代・中世の哲学思想に多くを負っていたデカルトが、14世紀のウィリアム(オッカム)や16世紀のフランシスコ・スアレスを差し置いて「近世哲学の父」と称される資格があるとすれば、まさにこの点によってである。

他方で、デカルト形而上学の終盤(『省察』最終章の「第六省察」)で提示される機械論的自然観に至るまでの諸論(「第一省察」から「第五省察」)については、古代・中世の哲学思想との緊密な関係性がすでに指摘されている。たとえば、デカルト哲学に固有の特徴として、〈私〉という代替不可能な一人称主体がいわゆる近代的自我として哲学体系の起点とされたという点が挙げられるが、しかし周知のように、この特徴はすでにアウグスティヌス『告白』において認められるものであり、『神の国』においては「私が欺かれるならば、私は存在する」という極めてデカルト的なテーゼが見出されるのだ。また、矛盾律をも犯しうるデカルト的神の全能性もモンテーニュ『エッセー』のうちに見出されるものである。

それでは、機械論的自然観がそこから導出されるどころの形而上学的諸論(方法的懐疑、コギト論、神論、自由意志論)のうちには、「近世的」と形容されうる独自の要素は見出されないのか、また見出されるとしたらそれは何であるのか——本研究の課題はこの問題を〔部分的にでも〕究明することにある。そして本稿は、自然科学の発展に寄与したデカルト形而上学が、実は自然科学的な手法の影響を受けている、ということを論証し、デカルト形而上学を「近世的」とみなしうる要素としてこれを提示する。なお、デカルト自然学に関する研究や彼の形而上学による自然学の基礎づけに関する研究は複数ある一方で、自然学的手法がデカルト形而上学にも見出されることを明らかにする研究は少ない。たとえば Vogel(1990)は、人間の感覚的経験は悪霊に欺かれた結果ではなく、外的世界は実在するという主張はいわゆる「最善の説明への推論」によって導かれると述べている。「最善の説明への推論」とは、一つの仮説を複数の中から最良のものとして選び取る方法として Harman(1965)が提唱したものである。彼によれば、「この推論では、ある仮説が証拠を説明するであろうという事実から、その仮説の真偽を推論することになる。一般的に、証拠を説明する可能性のある仮説は複数存在するので、推論を行うことでそれが保証されるためには、それら代替仮説をすべて否定できなければならない。こうして、ある仮説が他のどの仮説よりも証拠を「よりよく」説明するという前提から、ある仮説が真であるという結論を推論するのである」。

そして本稿は、同じことが外界の存在論証だけでなく、コギト論にも当てはまるということを明らかにしたい。そのために論者は、デカルト形而上学の方法論を自然科学のそれとの類比で検討していく。すなわち、観察ないし実験を行いその結果を解釈

するという自然科学的方法がデカルト形而上学、とりわけ方法的懐疑およびコギトをめぐる一連の議論(「第一省察」および「第二省察」前半)にも見出されることを明らかにする。ただし、論者は、デカルトが意図的に自然科学的方法を形而上学に導入したということまでは主張しない。率直に言って、この主張を裏付ける文献的証拠はない。私が本稿で主張するのは、デカルトが事実としてそれを意図していたか否かにかかわらず、デカルトの形而上学的議論は自然科学的方法とのアナロジーによって再構成できる類のものである、ということである。もしこの主張が正当化されるならば、たとえデカルトが意識していなかったとしても、彼が形而上学を構築するにあたって当時目まぐるしく発展していた自然学の方法論に影響を受けていたという解釈の可能性が開かれるだろう。つまり本研究は、デカルト形而上学から自然学へという一方通行の影響関係だけでなく、自然学からデカルト形而上学へという双方向の影響関係を明らかにする一端となりうると思われるのである。